私の放送人生

第7回

元テレビ西日本プロデューサー
後藤文利氏

福岡市長選挙解説　後藤記者（右）
１９７２年

手荒いスタート

入社式の前、研修という名目で社から招集を受けた。昭和37年3月福岡県の八幡駅前で電車を降り、テレビ西日本に向かった。通用門で「団結」と書かれた鉢巻きを締めた先輩たちに誰何を受けた。

「君は何者か」「新入社員です。会社から出社するように連絡が来ました」「いま闘争中だ。通すわけにはいかない」というやりとりをしていると総務担当者が出てきて、私はやっと廊下に座り込んだ先輩たちを踏まないように縫うようにして社に入った。

まず、命じられたのは泊まり込み幹部社員の飯を炊き、掃除、郵便物の整理といった雑用である。丁度民放始まって以来の労働争議でロックアウト、2週間にわたる停波の最中で、壁には「会社は労働基準法を守れ」「団結」という紙が一面に貼られ、組合員は廊下や階段に座り込み労働歌を声高く歌っていた。

ここは放送局なのか、と思った。異様な雰囲気の中での放送人生のスタートだった。

労働争議真っただ中の入社

入社式が終り研修を受けていたとき、報道のデスクが割り込み「門司の山城屋デパートを知っている者はいるか」と声を掛ける。北九州生まれの私が「ハイ」と手を上げると「デパートの宝石売り場で盗難だ、すぐに行け」。取材記者もストライキで居らず入社一週間の新人を取材に行かせる、と言うわけである。

デパートの宝石売り場のガラスケースは割られ、警官が現場検証をしている。カメラの撮影は進んでいるが、原稿を書く私は誰に何を聞いていいのか分からない。年配で手袋をして指図している偉そうな警官に格好をつけて「何をいくら取られたとですか」と問うと、その警官はニヤリと笑って「新人さんじゃな、わしは鑑識じゃ、聞いてやろうか」と原稿のネタになる数字を現場の刑事に聞いてくれた。

帰社後1分のニュース原稿を書いた。見たデスクは何も言わずその原稿をゴミくず入れにポイと捨てた。その繰り返しが4、5回続いた。入社して一週間後、記者がいないとはいえ手荒な話である。そんな訳で配置は希望通りの報道にすんなり決まった。

新入社員の頃

当時のテレビ西日本のニュースの記者は私たち新人を入れて10人余り。これで福岡県、九州、山口をカバーして大きな事件はキイ局の日本テレビに生送りしていた。

ネクタイ締め原稿書く若き日の姿

キー局がフジテレビに変わったのは２年後の昭和39年である。

新入社員は貴重な戦力であり、ファッションショーから殺しまで現場に飛ばされた。台風が九州に近づくと鹿児島、豊後水道方向に向かいそうだ分かると別府に向かい、取材した。だから毎日鞄にシャツとパンツ、靴下を入れて出社した。

水害で崖崩れが起こり犠牲者が出たらしい、という情報が入ると行ける所まで車で行き、後はひたすら歩いた。

熊本の五木村が孤立した、という情報が入ると、３日歩いて現場に行った。自分の目で見て書くことをたたき込まれた。

時にはスタジオに駆り出される

炭鉱事故続発

昭和38年（１９６３）11月９日、大牟田の三井三池三川鉱で炭塵爆発事故が発生した。発生は午後３時半頃、第一報は死者数名、坑内に多数が閉じ込められている模様、というものだった。すぐに大牟田に向かった。

半円形の坑口には鉱員や家族が詰めかけていた。炭車がゆっくり上がってくると、蓆をかけられた真っ黒に焼けた遺体が次々に姿を見せた。後年坑内に入ったが、坑内には石炭の細かい粉・炭塵が舞っている。それが炭車のブレーキによる火花で引火すると一瞬で坑内は炎と一酸化炭素に包まれる。逃げ場はない。炭車の蓆から虚空を掴むように焼けただれた手が突き出している。その炭車に向かって家族がすがりつく。地獄絵図のようであった。

最終的に死者４５８人、ＣＯ中毒患者８３９人に上る戦後最大の炭鉱事故となった。優秀なビルド鉱の三井三川鉱で起こったからもう炭鉱事故は終わりだろうといわれたが、二年後福岡県稲築町山野鉱で再びガス爆発が起きた。

昭和40年６月１日昼過ぎ、地下４９０メートルの坑道でガスが爆発、坑内にいた２３７人が死亡、29人が重軽傷を負った。遺体は山野鉱の講堂に並べられた。この光景が繰り返された。

昭和３９年　三池炭鉱事故現場

ニュースと番組

ニュース取材に追われながらも私は次第にテレビドキュメンタリーに関心を持つようになった。教育ドキュメンタリーを企画した。

昭和42年、地方紙の社会面に「今年もきめいあとりえの作品がモスクワ児童画作品コンクールで優秀賞を獲得した」というベタ記事が載った。なぜか頭にその絵はどんな絵だろう。どんな子どもたちがどんな指導者のもとでどのようにして描いたのだろう、という疑問がついて回った。

私は企画書を出し、所在地の熊本八代に向かった。「きめいあとりえ」は主宰者、八代高校美術教師・正木希明さんの名を取った私塾で、庭に建てられたアトリエに近くの子どもが通ってくる。

八代の老高校教師は子どもの個性を生かさない画一的教育に反撃を加えたいと思っていた。きめい

さんは１４～５人の小学生と同じ目線で見、向かい合った。画材は近くの八代海で取れた太刀魚や蟹を持ってこさせ、子どもに目の前で魚の口を開けさせる、するといままで見たこともない鋭い歯が飛び出す。

ジョーズのように魚が迫ってくる。この驚きを子どもたちに描かせる。色使いも自分で感じた色を作り出させる。あるときは、きめいさんが奥さんから借りたワンピースに前掛けをしてモデルとして登場する。下はステテコ姿だ。会場は子どもたちの笑いの渦に包まれる。暫くポーズをとったきめいさんは子どもたち一人ひとりの前にしゃがみ込み良いところを必ず褒めてやる。子どもたちの心は躍動し、目が輝いている。そんな心が絵に映し出される。

このきめいさんの児童画教育をどのような形で番組にするか、丁度モノクロフィルムからカラーに変わる転換期でアリフレックスカメラで最大３分しか撮影できない。しかも絵と音がリップシンクしない。子どもたちにカメラになじんで貰うために暫く空廻しして貰った。次は構成である。

ドキュメンタリー「きめいあとりえ」取材（中央）

当時ナレーションに音楽を付けるのが一般的であった。児童画教育の専門家でもない私がもっともらしいナレーションを書くのはおかしい。現場の先生と子どもの会話のやりとりの映像と音を出来るだけ合わせ、先生の考え方を生かしたい所はインタビューしたテープで表現した。

結果的にノーナレーションという当時としては珍しい形になった。戦後の経済成長で子どもをあちこちの塾に通わせる詰め込み教育が始まっており、子どもの個性を生かした児童画教育の必要性を痛感していたきめい先生はこの作品を持って全国の教育現場を廻った。

天草五橋取材事件

昭和４１年９月に九州本土と天草の島々を結ぶ五橋が完成することになり、特番制作を部長から命じられた。この部長は大変な大酒飲みで朝から安酒の匂いをプンプンさせ、私に特番を命じながらゲップを出すほどだった。

昭和４１年天草五橋開通記念セレモニー

事前に天草の島々の生活や文化をフィルム取材し、当日の生中継にインサートしようと取材に出かけた。天草と言えばクリスチャン天草四郎時貞である。この銅像が大矢野島に完成して白い布で巻かれている事を聞き、島の観光課長に取材を依頼して布を外して四郎の像を撮影した。念のためこの映像は開通式用であり、それまでは一切使用しないことを名刺の裏に約束して帰社した。

帰社したところいきなり局長に「後藤、社長が呼んでいる、部長も一緒に上がれ」と苦虫をかみつぶした顔で言われた。平の私は局長に声を掛けられたことはないし、ましてや社長は雲の上の人である。

社長の机には一通の巻紙の手紙があり、それを読まされた。

それは町長から寄せられたもので「貴社の担当者が観光課長の制止を振り切り、天草四郎像を包んでいた布を剥ぎ取った。この行為に抗議するものである」旨と書かれてあった。

局長は「これは謹慎ものですな。社長、そのように処分しますが」と言った時、いつも酒臭く、席で二日酔いの粉薬を飲んでいた部長が「ちょっと待って下さい、後藤は私の部下で、私は後藤から何も報告を受けていません。後藤から話を聞き、天草の話も聞くのが筋ではないでしょうか」。社長は「それも筋だな、君が天草に行って調べてきたまえ」。部長は出発前、私に「なあ後藤、天草の酒が旨い

か焼酎がうまいか」と言ってニッヤと笑った。まもなく天草から電話があった。「町長が銅像撮影の話を聞いて課長に糺した所、ワンマン町長が怖くなった課長がお前らが勝手にやったと話を作ったそうだ。お前の約束した名刺も出てきた。社長には話しておく、無罪放免だ。いまから地物の酒と焼酎を飲みに行く」。私は二十代で人を見る目の無さを知って恥じた。

ソウル特派員から『海峡』へ

昭和48年春私はＦＮＮ（フジニュースネットワーク）の韓国特派員としてソウルに赴任した。

当時の韓国は朴正熙大統領率いる軍事政権で、戒厳令が敷かれ夜間12時以降は外出禁止。街の要路には土嚢が敷かれ銃を持った兵士が警戒に当たっていた。

5月に着任して挨拶回りも終り韓国の文化である焼き物や歌曲に関心を持ち始めていた8月13日夜10時頃、支局の金さんが怒鳴るようにして電話を掛けてきた。「金大中があらわれました。東橋洞の自宅です。すぐに行きます」。

日韓の政治を巻き込んだ金大中事件の始まりである。

FNN ソウル支局時代

東京のホテル・グランドパレスから拉致された元大統領候補が生き延びてソウルに姿を現したのである。戒厳令下、宿に帰ることも出来ず支局にごろ寝する日が続いた。

取材のため毎日のように東橋洞に通った。東橋洞の入り口は情報機関員で固められ、マスコミのうち外信だけは渋々通過が許された。次の日には必ずと言っていいほど特高が支局に現われた。「何を送りましたか」と聞いてくる。電話は盗聴され、都合の悪いときにはプツンと切られ、大声で「つなげ」と叫ぶと再び繋がるという状況だった。

金大中大統領候補を取材

金氏の描く国家像の話になると盗聴をおそれ筆談になった。

夜遅くなると夫人が一緒にと食事を出してくれた。ご飯に汁、焼き魚とキムチ。一国の大統領候補の食事としては実に質素だった。

翌年の8月15日韓国の「光複節」という解放記念日に当たり、朴大統領が式典会場で演説をしているのを夏休みを利用して尋ねてくれた家族とテレビ中継を見ていた。突然に銃声が響き、大統領の後ろに座っていた陸英修大統領夫人がゆっくり崩れ落ちた。

在日の文世光による大統領狙撃事件である。直ちに戒厳令が敷かれ、文の使ったピストルが日本の警官から盗んだものであった事から猛烈な反日デモが起こった。

そんな時、昼食を取りながら側にあった雑誌をめくっていると、「イルボンハルモニ（日本のおばあさん）がソムジン江の河東で船頭をしている。」ベタ記事に櫓をこぐ女性の小さな写真が載っていた。

名前は角野春子、年齢不詳。それだけの記事だった。

ソムジン江と言えば韓国南部、慶尚道と全羅道を分ける韓国第三の河である。

昭和５６年秋　ドキュメンタリー『海峡』
ソムジン江の女船頭　角野春子を取材

そんな田舎になぜ日本人が、しかもおばあさんがいるのか、何かある、が反日デモのソウルを空ける訳にはいかない。電話もない田舎なので手紙を書いた。返事はなかった。

半年ほどたった帰国直前、開封されあちこち破れた手紙が届いた。

河東の中学校の教師から「角野春子さんは間違いなく日本人で、韓国人の夫と別れ、一人息子を養いながら女船頭として村人の役に立っています」という内容だった。

訪ねる時間もなく私は帰国した。

九州はドキュメンタリーの宝庫

昭和四十年代から九州、山口の地方局の制作するドキュメンタリーが数々のコンクールで受賞し、全国から注目された。

当時の九州の状況は日本の近代化を支えた筑豊の石炭の時代が終り、相次ぐ事故で閉山に追い込まれた炭坑の男たちと家族たちは行き場を失っていた。

長崎の原爆問題もあった。

さらに水俣病など公害問題が放置されていた。

また地理的位置から、博多や下関から戦前、朝鮮半島や中国に渡った人たちの中で女性や子どもたちが置き去りにされるという戦後処理が未解決のままだった。

このようなテーマを作品にするのに九州、山口制作者セミナーの存在が大きな役割を果たした。その中心にいたのはＲＫＢ毎日放送の木村栄文さんである。

昭和四十年代の初め木村栄文さんから誘いがあった。

「九州、山口のディレクター、記者で番組を作っている仲間が集まって勉強会を開きたい。それには系列、ＮＨＫと言った壁を取り払って現場同士どうしたらいい作品が出来るか、会社の業務でなく自主的に集まる会を作りたい。参加しないか」、今までに無い発想であった。

系列やＮＨＫの壁を越えて二十代、三十代の番組に情熱を持った制作者が九州、山口から集まった。福岡の国民宿舎で、持ってきた作品を見、遠慮会釈ない意見を交換した。

土曜の朝から日曜の夕方まで寝ずに作品を見て議論した。

老齢の評論家和田矩衛氏が梁山泊のような世界に付き合ってくれた。

参加者は年々増え、九州、山口制作者セミナーと言う名前もついた。私には、普段交流のない他系列、ＮＨＫの現場の人間と忌憚なく意見を交わせることが新鮮だった。栄文さんは次々に話題作を九州から発信して行った。

昭和45年の水俣病をテーマにした『苦海浄土』、筑豊を舞台にした『まっくら』、テキ屋の世界を描いた『祭り囃子が聞こえる』、在日朝鮮人、韓国人の社会に飛び込んだ『草の上の舞踏』などで芸術祭賞、民放祭賞、ギャラクシー賞を受賞、九州発のドキュメンタリーの質の高さを日本中に広めた。

手法も自分自身が登場したり、俳優を使って自分の意図するところを表現した。

地方局にとって受賞は有り難かった。地道なドキュメンタリーに光が当たり、次の番組制作がし易くなったからである。

この制作者セミナーで刺激を受けた多くの制作者が育ち、優れた作品を生み出した。テレビドキュメンタリーの青春時代だった。

私は韓国から帰国後、船頭をしている角野春子を追った。彼女は終戦前、大阪で韓国から労働者として日本に渡ってきた金チャンイと知り合い結婚。終戦とともに夫の故郷に子どもを背負って渡った。植民地だった韓国には反日感情が渦巻いており、義母に追われ放浪の末河東の女船頭として生きるすべを見いだしていた。

調べて行くと、このような日本女性が数千人いることが分かった。釜山地区では芙蓉会国田房子会長の下で、三百人が肩を寄せ合ってひっそりと生きていた。

芙蓉会釜山本部　国田房子会長にインタビュー

戦前「内鮮一体化政策」で日本の炭坑や工場で働いていた朝鮮半島出身の男性との結婚奨励政策が取られた。終戦とともに数千人の

女性たちが夫の故郷に行くために海を渡った。そこにはほとんど韓国人の妻や子がいた。

夫の親や反日の地域になじめず、帰国しようとしても1965年の日韓条約までの20年間は領事館もなく、庇護もなかった。やっと帰国しても親の代は代わり、朝鮮への差別でいたたまれずまた釜山へ舞い戻って来ていた。

国田さんの家は「駆け込み寺」のようになっていた。このような日本女性たちの姿を2年間追って『海峡』というタイトルで放送した。すぐに反響があった。「私の姉も上山田炭坑で働いていた男性と韓国に渡りました。『慶州ナザレ園』の近くにいると聞きました。探す手立てはないでしょうか」私たちは姉を一緒に探した。36年ぶりに姉妹が再会した。また福岡のロータリー、ライオンズクラブといった様々な会から「このような女性たちの存在を知らなかった。仲間たちと釜山に行ってくれませんか」、また釜山に渡った。国田さんたちに「いま、一番欲しいものは何ですか」「憩いの家です」。

当時、韓国社会では日本語を話すことがはばかられた。彼女たちが日本語で話し、笑い、故郷の歌を歌う、そして一緒に寝泊まりするそんな場所が欲しかったのだ。

福岡の会員たちが費用を出し合って釜山の高台に「憩いの家」が実現した。

捨てられた日本人妻たちがひっそりと暮らす「慶州ナザレ園」への支援も始まった。女性たちの会「芙蓉会」の会長をしている国田さんがお礼の席でこう述べた「一番嬉しかったのは、私たちを同じ日本人として憶えていて下さったことです」このあとまもなく106歳になる国田さんと今も交流を続けている。

ドキュメンタリー『海峡』
在韓日本人妻たちにインタビュー

この作品は民間放送連盟賞、赤十字国際映画賞を受賞した。

ギャラクシー賞授賞式

私の放送人生

私が、80歳になった家族から祝いの席で、台風が来ると家を出て取材に行き君たちの出産にも立ち会えず、家族に父親が必要なときに家に居なかった事を話した。

「父の詫び状」のつもりであった。

長男から「それは、家族のために働いたの」と聞かれた。

「いやあ、番組をどう作るかは苦しかったけれど楽しかったよ」と応えると「父が好きなことをして生きてよかった」と皆が合わせるように答えた。

まだ作りたいな、私の放送人生である。

後藤文利氏の放送人生

昭和37年　テレビ西日本入社、報道課でニュース、番組制作に当たる。
昭和48年　FNNソウル特派員として韓国に駐在。帰国後、主としてテレビドキュメンタリーを制作。
平成9年　制作局長から報道局長へ。
平成10年　ゼネラルプロデューサーとなり日韓のドキュメンタリーを企画。
平成13年　テレビ西日本退職。
久留米大学非常勤講師となる。
平成20年　久留米大学退職。

趣味の陶芸で自作の茶碗を持つ後藤文利氏（現在）